

精神科外来における
診察前薬剤師面談の手引き

一般社団法人 日本病院薬剤師会

令和7年8月27日作成

Ver.1.0

目次

1. はじめに	3
2. 精神科外来における診察前薬剤師面談の目的	4
3. 精神科外来における診察前薬剤師面談の業務内容	4～6
3.1 患者情報の収集・評価	
3.2 外来患者の服薬状況評価	
3.3 副作用評価	
3.4 処方提案・検査提案	
3.5 ポリファーマシーへの取り組み	
4. おわりに	7
別紙	8～10

1. はじめに

我が国の地域精神保健医療福祉については、平成16年9月に策定した「精神保健医療福祉の改革ビジョン」において「入院医療中心から地域生活中心」という理念を明確にし、様々な施策が行われてきた。近年、精神疾患を有する患者数は増加傾向にあり、平成29年には約420万人となっており、傷病別の患者数をみると脳血管疾患や糖尿病を上回るなど、国民にとって身近な疾患となっている。こうした中、平成29年2月には「これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」報告書において、精神障害の有無や程度にかかわらず、誰もが地域の一員として安心して自分らしい暮らしをすることができるよう、医療、障害福祉・介護、住まい、社会参加、地域の助け合い、教育が包括的に確保された「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム（にも包括）」の構築を目指すことを新たな理念とし、重層的な支援体制の整備などの施策が進められ、精神疾患患者の地域移行が図られている。今後、精神科病院においても、「少子高齢化」・「地域医療構想に基づいた精神病床数の削減」・「精神疾患患者の地域移行」等の影響から入院患者の減少が予想され、私たち病院薬剤師においては入院患者への対応のみならず地域移行を進める上で、増加する外来患者への関わり・地域医療連携の関わりが重要になると思われる。

近年、がん領域においては増加する外来がん患者への病院薬剤師の取り組みとして、薬剤師による診察前外来が注目されている。医師の診察前に服薬状況、副作用の有無等の情報を患者から直接収集し、評価を行った上で医師に情報提供をする業務となっており、外来で治療を受ける悪性腫瘍の患者が安心・安全な化学療法を受けられるようサポートすることを目的としている。このような取り組みはハイリスク薬が多く使用される精神科においても必要と考えられ、薬物治療を通じて外来患者の地域生活を支えるとともに、タスク・シフト/シェアの観点から勤務医等の業務負担軽減にも期待できる。また、薬剤師が医師の診察前に外来患者と面談し、診察時に薬学的評価を医師へ提言することにより、服薬アドヒアランスや薬物療法の完遂率が向上すると考えられ、服薬アドヒアランス不良に基づく再発・再入院の回避やポリファーマシーに基づく薬剤有害事象の回避など、精神科においても診察前薬剤師面談のメリットは大きいと考えられる。

医療現場においては、地域社会や医療環境の特性に応じた診察前薬剤師面談が実践され、薬剤師の更なる職能発揮を目指すことが望まれる。薬剤師マンパワー不足に悩む精神科病院も多く、薬剤師を外来にまで配置する難しさはあると思われるが、会員各位におかれては、本書を参考に診察前薬剤師面談を積極的に推進し、業務を通じて患者安全の確保や臨床的なアウトカムが得られるよう更なる業務展開をお願いしたい。

2. 精神科外来における診察前薬剤師面談の目的

診察前薬剤師面談を通して、下記のアウトカムを得ることを目的とする。

- (1) 外来患者に対する最適な薬物療法の実施による有効性・安全性の向上
- (2) 疾病の治療・改善、精神的安定を含めた患者のQOLの向上
- (3) 医薬品適正使用推進による治療効果の向上と副作用の防止による患者利益への貢献
- (4) 生活習慣等を考慮した服薬アドヒアランス維持への貢献
- (5) 他の医療機関や保険薬局等との連携を通し、地域社会や医療環境の特性に応じた地域医療への貢献

3. 精神科外来における診察前薬剤師面談の業務内容

診察前薬剤師面談を実施する際には、「何のために」「どこで」「何をするのか」を明確にしておくことが重要である。特に、院外処方箋発行医療機関等においては保険薬局との間で業務のすみわけをあらかじめ整理しておくことが望ましい。医師や診療チーム内での協議により、患者と薬剤師はどのタイミングで面談するのか、また、薬剤師からの情報を医師や多職種、他の医療機関等へどのようにフィードバックするのか等の運用ルールを決めておく必要がある。まず、「何のために」については、前述の患者アウトカムの向上を図ることが目的となる。「どこで」については、診察室付近の患者相談スペースや薬剤部内の面談室など、患者のプライバシーが確保され、かつ診療導線上で面談がスムーズに行える場所が適切である。「何をするのか」は各施設で異なってくると考えられるが、先行しているがん領域などの取り組みを踏まえ、精神科医療においても以下のような業務を検討する。

<業務内容>

患者情報の収集・評価 / 外来患者の服薬状況評価 / 副作用評価 /
処方提案・検査提案 / ポリファーマシーへの取り組みなど

3.1 患者情報の収集・評価

- 初回面談以前の患者情報を確認する。他の医療機関からの処方薬や一般用医薬品、サプリメントを含めた服薬状況、既往歴、薬剤間相互作用、禁忌歴、アレルギー歴、副作用歴を確認する。医師・看護師からの情報や他の医療機関からの診療情報提供書による情報が得られない場合には、患者面談の際に必要な情報を直接収集する。
- 診察時に必要な情報や処方内容に影響する可能性のある事項は、診療録への記載や直接連絡により、診察前に速やかに医師等へ情報提供する。
- 入院患者が外来移行後に診察前薬剤師面談を受ける際は、入院中の担当薬剤師と診察

前面談を行う薬剤師は情報共有を行う。

- 2023年1月から、オンライン資格確認等ネットワーク並びに保健医療福祉分野の公開鍵基盤である HPKI (Healthcare Public Key Infrastructure) がスタートしており、患者の PHR (Personal Health Record) を利用した患者情報の収集を行う。

3.2 外来患者の服薬状況評価

精神疾患の多くは慢性疾患であり長期的な服薬継続が求められる一方で、服薬アドヒアランス不良となり再発・再入院を繰り返す場面が多く見受けられる。薬剤師が医師の診察前に外来患者と面談し、診察時に薬学的評価を医師へ提言することにより、服薬アドヒアランスや薬物療法の完遂率が向上し、再発・再入院の回避に繋がると考えられる。

- 服薬アドヒアランスを確保するため、患者の生活パターンを確認し、実現可能な服薬スケジュールを立案する。
- 他の保険医療機関からの処方薬を含め、使用中の医薬品がある場合は、その効果や副作用、服薬アドヒアランス等を確認する。
- 服薬アドヒアランスの評価は、面談時に服薬状況確認シート（別紙 1）等を用いることで、医師の診察に役立てることができ残薬状況等の把握が可能となり、処方箋発行前に処方日数調整・残薬整理等が可能となる。また、保険薬局等に服薬状況確認シートを FAX 等で事前に情報提供を行うことにより、診察後の処方薬に関する説明に役立てることができる。
- 統合失調症においては、薬に対する調査表（DAI-10：10-Item Version of the Drug Attitude Inventory）等を用いて、服薬に対する自覚的体験や服薬態度の評価を行う。
- 患者の理解不足による服薬アドヒアランス不良が疑われる場合、服薬の意義を含め、服薬指導を実施する。在宅での服薬管理が困難な患者においては、お薬カレンダーや服薬支援シート（別紙 2）などを用いた管理方法を情報提供する。
- 持続性注射剤（LAI：Long Acting Injection）は服薬アドヒアランスの向上が難しい患者以外でも、外来維持治療に有用で簡便な剤形として、服薬アドヒアランスが良好な患者へ生活習慣に応じて提案する。
- 吸入薬や自己注射薬への対応の場合は、どの薬剤や剤形であれば適切に使用できるのかを評価する。

3.3 副作用評価

- 特定薬剤である抗精神病薬服用中患者で薬原性錐体外路症状が疑われる患者に薬原性錐体外路症状評価尺度（DIEPSS）を実施する。
- 致命的副作用（悪性症候群、セロトニン症候群等）のモニタリング
- 特に非定型抗精神病薬では、血液疾患、内分泌疾患等のモニタリング
- 自殺企図等による過量服薬の危険性のある患者の把握と服薬管理の徹底を行う。

- 転倒・転落に関する要因の把握と注意喚起を行う。
- 身体合併症を併存する精神疾患患者は増加しており、特にハイリスク薬においては、日本病院薬剤師会が作成した「ハイリスク薬に関する業務ガイドライン Ver.2.2」を参考に業務を行う。

3.4 処方提案・検査提案

- 治療効果や副作用、服薬アドヒアランスの状況に応じて、必要な場合には処方内容や治療薬の変更を提案する。副作用管理のために支持療法の追加が必要な場合には、その処方内容を提案する。確認が必要な臨床検査項目がある場合には、検査オーダーを医師へ依頼する。
- 医師・薬剤師等が事前に作成・合意したプロトコールに基づく薬物治療管理（日本病院薬剤師会が推奨する Protocol Based Pharmacotherapy Management）が可能な場合には、院内ルールに従って実践する。
- クロザピンは CPMS（クロザリル患者モニタリングサービス）に基づいた定期的な検査が義務付けられた薬剤である。コーディネーター業務を兼務することの多い薬剤師は、検査オーダーの代行入力、服薬アドヒアランスの確認、副作用チェック、血液検査値や血中濃度モニタリングに基づく処方提案などの支援が可能となり、これらの対応により副作用の予防や重篤化の回避につながる。
- 「特定薬剤治療管理料 1」の対象薬である、リチウム・クロザピン・カルバマゼピン・バルプロ酸においては各薬剤に応じた定期的な検査オーダー提案を行う。

3.5 ポリファーマシーへの取り組み

- ポリファーマシー対策を地域に繋げるため、医療機関や保険薬局、介護施設・事業所等に情報提供が必要である。ポリファーマシー対策の進め方は、日本病院薬剤師会「ポリファーマシー対策に関する特別委員会」が作成した「ポリファーマシー対策の進め方 (Ver 2.1)」を参考にし、情報提供のツールとして当委員会が作成した「薬剤管理サマリー（精神科版）」を用いると便利である。
- 抗コリン作用を有する向精神薬が多く、日本老年薬学会で作成された「日本版抗コリン薬リスクスケール」は総抗コリン薬負荷をスコアとして算出できるため、精神科でも非常に役立つものとなっている。
- 多剤処方や不適正処方（PIMs）が疑われる患者においては保険薬局と連携し、ポリファーマシーへの取り組みを実施する。『高齢者の安全な薬物療法ガイドライン 2015』を用いた調査では 76.9%の患者に P I M s が存在していたと報告され、有害事象を引き起こす薬剤として、長時間型ベンゾジアゼピン受容体作動薬（B Z D）、スルピリド、短時間型 B Z D などが上位にあげられている。
- 介入困難事例などにおいては多職種による定期的なカンファレンスを実施する。

4. おわりに

慢性的な薬剤師マンパワー不足に悩む精神科医療においては病棟における薬剤師の常駐体制による業務普及率も低く、「薬剤師を外来に配置する余裕はない」「診察前面談はまだ先のはなし」と思われるかもしれない。ただ、『にも包括』に基づいた精神疾患患者の地域移行は確実に進んでおり、安全かつ質の高い地域・在宅医療の実現には薬剤師の積極的な薬物療法への参画が重要である。

引用文献

- 日本病院薬剤師会 外来患者への薬剤師業務の進め方と具体的実践事例
- 日本病院薬剤師会 ハイリスク薬に関する業務ガイドライン (Ver 2.2)
- 日本病院薬剤師会 ポリファーマシー対策の進め方 (Ver2.1)
- 日本老年薬学会 日本版抗コリン薬リスクスケール
- 日本老年医学会 高齢者の安全な薬物療法ガイドライン 2025

令和7年8月27日
一般社団法人 日本病院薬剤師会
精神科病院委員会

(別紙1：記載例)

薬剤師による診察前外来時に服薬状況確認シート（別紙1）を用いて評価を行う。

項目3においては、まずは患者に5段階で自己評価を行ってもらい、その後、担当薬剤師が残薬状況などから客観的に評価を行う。

項目5においては、各薬剤の残薬状況を記載し、終了時に服薬状況確認シートを患者に渡し、診察場面で役立ててもらおう。担当医が服薬状況を把握し、処方日数等の調整を行う。

服薬状況確認シート

日病 太郎 先生

担当薬剤師：日病 次郎

患者 ID：	処方発行日：
患者氏名：日病 花子	<input checked="" type="radio"/> 本人 ・ 家族 <input type="radio"/> 性別： 男 ・ <input checked="" type="radio"/> 女

項目1. ご自宅に残薬はありますか？ ある ・ ない

項目2. 前回処方された（慢性疾患の）お薬について伺います。

⑤ 薬を飲み忘れたことがある はい ・ いいえ

⑥ 薬を飲むことに関して無頓着である はい ・ いいえ

⑦ 調子がよいと薬を飲むのをやめる はい ・ いいえ

⑧ 体調が悪くなると薬をやめる はい ・ いいえ

項目3. 前回処方された（慢性疾患の）お薬をどのくらい飲みましたか？

すべて指示通りに飲めた場合を「5」、全く飲めなかった場合を「0」として点数をつける

(Brief Adherence Rating Scale を一部改編)

薬剤師評価欄

朝： 0 1 2 3 4 5 (3)

昼： 0 1 2 3 4 5 (3)

夕： 0 1 2 3 4 5 (4)

寝： 0 1 2 3 4 5 (5)

項目4. お薬を飲めなかった・飲めなかった理由を教えてください。（複数回答可）

しっかり忘れ ・ 量が多い ・ 服用回数が多 ・ 食事が不規則

飲み込みにくい ・ 飲み方が難しい ・ 飲む理由が分からない ・ 副作用が不安

その他（朝は起きる時間が遅く忘れてしまう。昼は外出することも多く、飲み忘れる。）

項目5. 残薬状況

(以下の日数分が残薬としてあります。処方される際に日数調整をお願いします。)

薬剤名	残薬数	残日数	薬剤名	残薬数	残日数
1. アリピプラゾール	5 錠	5 日分	3.		
2. ロゼパム	15 錠	5 日分	4.		

日本病院薬剤師会 精神科病院委員会作成（服薬状況確認シート Ver1.0）

(別紙2)

服薬支援シート

【活用方法】

このシートはご自宅での服薬管理の手助けになるものです。

お薬を飲んだらチェックをすることで飲み忘れ・服薬パターンを把握することができます。

診察時に主治医・薬剤師に確認してもらうことでお薬の整理に役立てることができます。

2025年 ○月

	日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6	7
朝	○	○					
昼	○	×					
夕	○	○					
就寝前	○	○					
	8	9	10	11	12	13	14
朝							
昼							
夕							
就寝前							
	15	16	17	18	19	20	21
朝							
昼							
夕							
就寝前							
	22	23	24	25	26	27	28
朝							
昼							
夕							
就寝前							
	29	30	31				
朝							
昼							
夕							
就寝前							

日本病院薬剤師会 精神科病院委員会作成 (服薬支援シート Ver1.0)